

原 著

患者からの病院職員に対する暴力の実態調査

——暴力の経験による職種間比較——

友田 尋子¹⁾・三木 明子²⁾

宇垣 めぐみ²⁾・河本 さおり²⁾

A Survey of Violence Committed by Patients against Hospital Workers

——A Comparison between Various Healthcare Professionals——

TOMODA Hiroko, MIKI Akiko, UGAKI Megumi and KAWAMOTO Saori

Abstract : It's been reported that healthcare-related professions have a high risk of being the victims of violence, with reports of actual violence at medical work sites. According to the labor safety hygiene guidelines at nursing workplaces, we can see from actual conditions that even a nursing supervisors recognize the reality of violence, yet no sufficient organizational measures have been taken to prevent such events. There have been no adequate investigations regarding actual damage and violence, nor measures to prevent it for any type of general hospital or clinic jobs. The purpose of this study is to clarify the real conditions of damage suffered due to patient violence against hospital workers, compartmentalized by job. This study covers all workers in general hospitals and examines the experiences of victims. Results show that the rate of hospital workers who have been victims of patient violence over the past year is 56.4% (35.7% male, 63.8% female). When broken down into each job type, there are some differences in the victim rate, with 67.5% of nurses, 50.0% of clerical workers and 39.5% of clinical technicians having such experiences.

Regarding the types of violence these workers were subjected to, 46.7% reported psychological violence, 25.7% experienced physical violence and 19.7% noted sexually related violence. Psychological violence was the most noted for all job types. Violence victims by gender showed that women experienced more in physical, psychological and sexually related violence. The job types and gender bias show a significant relationship in physical, psychological and sexually related violence. The victim's ages and years of work experience exhibit a significant relationship to physical and psychological violence.

Key Words : violence (committed by patients), rate of violent events, hospital workers

抄録：保健医療従事者は暴力の危険が高い職業の1つであることが示され、医療現場での暴力の実態について報告がなされている。看護の職場における労働安全衛生ガイドラインによると、看護管理者が暴力の実態を認識しても十分に組織的対策を講じているとはいえない現状がみえている。総合病院や病院内の全職種において、暴力被害の実態や対応について十分に検討されていない。本研究の目的は、病院職員を対象に職種別に患者暴力の被害実態を明らかにすることとし、本研究では総合病院の全職員を対象とし、職種別の暴力の経験を検討することとした。経験した職員が少なかった栄養士・調理師及びその他を除いた医師、看護職、薬剤師、検査技師、事務職で検討した結果、過去1年間に患者暴力の被害経験がある病院職員は56.4%（男性35.7%、女性63.8%）であった。職種別にみる

¹⁾甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科

²⁾筑波大学大学院人間総合科学研究科

と、看護職が67.5%、事務職50.0%、検査技師39.5%であり、患者暴力の被害経験率が最も低かった職種は医師34.6%であり、職種によって患者暴力の被害経験率に開きがあった。暴力の種類別の被害経験率は、精神的暴力46.7%、身体的暴力25.7%、性的暴力19.7%の順であった。職種別にみると、全職種において精神的暴力の被害経験率が最も高かった。性別にみると、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力のいずれにおいても女性が男性より患者暴力の被害経験率が高かった。職種および性別は身体的暴力、精神的暴力、性的暴力と有意に関連していた。年代および経験年数は身体的暴力、精神的暴力と有意に関連していた。

キーワード：患者暴力、暴力被害経験率、病院職員

I. 緒 言

保健医療従事者は暴力の危険が高い職業の1つであることが示され、医療現場での暴力の実態について報告がなされている¹⁾。2004年3月、看護の職場における労働安全衛生ガイドライン²⁾によると、看護管理者が暴力の実態を認識しても十分に組織的対策を講じているとはいえない現状がみえている。

保健医療分野での患者暴力に関する定義や測定方法は、研究者により異なっていることを前提として、Poster³⁾は4カ国の精神科看護師の調査(n=999)を行い、過去に1回でも暴力を受けたことがあるのは75%であり、国別では米国76%、英国78%、カナダ94%、南アフリカ51%であったと報告している。またShenら⁴⁾は台湾の精神科看護師(n=408)のうち、45.1%が過去6か月間に攻撃またはセクシャルハラスメントを経験していたと報告している。一般病院の職員の暴力の実態を示したArnetzら⁵⁾のスウェーデンでの調査では、暴力または脅しの過去1年間の発生状況は、1995年2476人のうち11.5%、1997年2354人のうち11.7%であったと報告されており、精神病院での暴力の経験率よりも低いことが示されている。わが国では、日本看護協会が2001年と2003年に実態調査を行っている。2001年の調査結果⁶⁾では、回答した3,119病院のうち過去1年間に院内で発生した患者からの病院職員への暴力は昼間、夜間ともに3割弱であった。2003年の調査結果⁷⁾では、首都圏(n=829)と首都圏以外の地域(n=389)ともに、過去1年間の暴力の発生状況は、身体的暴力と言葉の暴力いずれも約3割であった。わが国の患者暴力調査は精神科看護師を対象にした実態調査^{8)・10)・15)}が多く、一般病院に限定した身体的暴力の経験率15%⁹⁾と比較すると、精神病院での経験率は32.4~89.9%^{8)・10)・15)}と高い傾向にある

ことはわかってきた。

病院現場での患者暴力の被害については看護職を中心に実態が報告されているが、看護職以外の職員についての報告は少ない。病院職員の患者暴力の実態調査では、医師の過去6ヵ月の暴言の経験率は24.1%、暴力は2.1%との報告¹⁶⁾がある。また、患者暴力の事例分析から、病院職員(医師、検査技師、理学療法士、事務職など)が暴力を受けやすい場面の特徴や暴力の被害状況と影響が示されている¹⁷⁾。一方、精神科病院での職種別の被害実態調査の結果¹⁸⁾では、過去1年間の12職種の被害経験は、言語的暴力71.6%、威嚇64.3%、身体的暴力61.0%、性的暴力31.1%であり、看護職の経験率が最も高いことが報告されている。このように少数ではあるが、病院職員を対象に患者暴力の被害実態について報告を認めるが、総合病院や院内の全職種において、暴力被害の実態や対応について十分に検討されていない。

そこで本研究の目的は、病院職員を対象に職種別に患者暴力の被害実態を明らかにすることであり、本研究では総合病院の職員すべてを対象とし、職種別の暴力の経験を検討することとした。

II. 研究方法

1. 目的

病院職員を対象に患者から受ける暴力の被害実態を明らかにし、患者暴力についての職員教育の示唆を得ることを目的とした。

2. データの収集方法

平成20年1月、A大学附属病院の全職員1,472名に無記名自記式質問紙調査を実施した。所属長を通して各部署に調査票を配布した。回収方法は事務窓口回収箱を設置し、強制的な回収にならないよう配慮し

た。なお、回収箱の留め置き期間は3週間とした。

3. 調査票の内容

独自に作成した調査票は、基本属性（職種、性別、年代、職位、経験年数）、過去1年間の暴力の被害経験の有無（身体的暴力、精神的暴力、性的暴力の計35項目）で構成した。

4. 分析方法

初めに、対象者の基本属性、患者暴力の経験の有無、暴力の種類別（身体的暴力、精神的暴力、性的暴力）の経験率および暴力35項目別の経験率を算出した。なお、割合は欠損値を除いて算出した。次に、暴力の経験の有無と基本属性（職種、性別、年代、職位、経験年数）との関連について種類別と項目別に χ^2 検定（データ数が少ないものはFisherの直接確率計算法）を行った。統計処理にはSPSS 16.0 J for Windowsを用い、統計学的有意差の判定基準は $p < 0.05$ とした。

5. 倫理的配慮

書面にて研究目的、得られたデータは研究目的外に使用しないこと、調査票は無記名であること、プライバシーの保護、対象者の拒否権、結果の公表等について説明し、これらの内容に同意を得られた場合にのみ本研究に参加することとした。調査票の提出を持って同意を得たとすることを明記した。また、本研究への協力は自由意思で行われるものであり、研究への協力を断ることができ、その場合は不利益を被らないこと、研究のデータおよび結果は研究実施者が分析し、第三者に情報が漏洩することはないこと、統計学的に処理し、個人が特定されないことを保障した。なお本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理委員会の承諾を得た上で実施した。

6. 暴力の定義

本研究で用いる患者暴力の定義は、ガイドライン注1)に準拠する形式で、身体的暴力（他の人や手段に対して身体的な力を使って身体的な危害を及ぼすものをいい、例えば、殴る、蹴る、叩く、突く、撃つ、押す、噛む、つねる等の行為）、精神的暴力（個人の尊厳と価値を言葉によって傷つけたり、おとしめたり、敬意の欠如を示す行為および威嚇・脅迫の行為）、性的暴力（意の添わない性的誘いかげや好意的態度の要求等、性的ないやがらせ行為およびストーカー行為）

とした。

III. 結果

1. 対象の基本属性

質問紙を回収した746名を分析対象とした（回収率50.7%）。対象の性別は女性が70.7%で、年代では30代が39.4%と最も多く、職種では看護職が53.7%、医師が18.1%を占めた。職位は非管理職が84.9%であり、実務経験年数は1-5年が34.2%で最も多く、平均12.1年（ ± 9.7 ）であった（表1）。

表1 対象の基本属性 (n=746)

		n (%)
職種	医師	133 (18.1)
	看護職	395 (53.7)
	薬剤師	32 (4.4)
	検査技師	45 (6.1)
	栄養士・調理師	18 (2.5)
	事務職	40 (5.4)
	その他	72 (9.8)
性別	男性	218 (29.3)
	女性	525 (70.7)
年代	20代	207 (27.9)
	30代	292 (39.4)
	40代	145 (19.5)
	50代以上	98 (13.2)
職位	管理職	109 (15.1)
	非管理職	614 (84.9)
実務経験年数	1-5年	249 (34.2)
	6-10年	128 (17.6)
	11-15年	133 (18.3)
	16-20年	78 (10.7)
	20年以上	140 (19.2)
実務経験年数	平均値 (\pm SD)	12.1年 (± 9.7)

注) 欠損値を除き割合を算出

2. 過去1年間の患者暴力の被害経験

患者暴力の被害経験率が低かった栄養士・調理師、その他、職種の記述がないものを除いた医師、看護職、薬剤師、検査技師、事務職の645名を分析対象とした。過去1年間に患者暴力の被害経験がある病院職員は56.4%（男性35.7%、女性63.8%）であった（表2）。職種別にみると、看護職が67.5%、事務職50.0%、検査技師39.5%であり、患者暴力の被害経験率が最も低かった職種は医師34.6%であり、職種によって患者暴力の被害経験率に開きがあった（表3）。

表2 病院職員の過去1年間における患者暴力の経験の有無

	全体	男性	女性
	n(%)	n(%)	n(%)
暴力経験あり	358(56.4)	60(35.7)	298(63.8)
暴力経験なし	277(43.6)	108(64.3)	169(36.2)

注) 欠損値を除き割合を算出

表3 職種別の過去1年間における患者暴力の経験の有無

	医師	看護職	薬剤師	検査技師	事務職
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)
暴力経験あり	45(34.6)	266(67.5)	11(36.7)	17(39.5)	19(50.0)
暴力経験なし	85(65.4)	128(32.5)	19(63.3)	26(60.5)	19(50.0)

注) 欠損値を除き割合を算出

3. 暴力の種類別の経験率

暴力の種類別の被害経験率は、精神的暴力46.7%、身体的暴力25.7%、性的暴力19.7%の順であった。

職種別にみると、全職種において精神的暴力の被害経験率が最も高かった。身体的暴力は看護職では37.0%と高いが、その他の職種では、事務職10.0%、医師8.3%、検査技師6.7%などであり、患者暴力の被害経験率に開きがあった。同様に性的暴力においても看護職と他職種の患者暴力の被害経験率に違いを認めた。性別にみると、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力のいずれにおいても女性が男性より患者暴力の被害経験率が高く、年代別にみると、精神的暴力は被害経験率に大きな違いはなかったが、身体的暴力および性的暴力では20代、30代の患者暴力の被害経験率が40代、50代以上より高かった(表4)。

4. 暴力の種類別の経験と基本属性との関連

患者暴力の被害経験率が低かった栄養士・調理師、その他、職種の記述なしを除いた医師、看護職、薬剤師、検査技師、事務職の5職種(645名)において、種類別の患者暴力の被害経験と基本属性(職種、性別、年代、職位、経験年数)の関連を検討した。

表5 暴力の種類別の経験と基本属性との関連 (n=645)

	職種 (n=645)	年齢 (n=644)	性別 (n=645)	職位 (n=631)	経験年数 (n=633)
身体的暴力	67.373**	24.153**	26.481**	4.038*	24.001**
精神的暴力	33.246**		23.683**		
性的暴力	58.187**	23.016**	33.546**	7.761*	17.548**

χ^2 検定: **p<0.01, *p<0.05.

職種および性別は身体的暴力、精神的暴力、性的暴力と有意に関連していた(表5)。年代および経験年数は身体的暴力、性的暴力と有意に関連していた。職位は身体的暴力、性的暴力と弱い関連を認めた。

5. 暴力の項目別の経験率

過去1年間に病院職員が受けた患者暴力の項目別の経験率の上位5項目は、「大声でどなられた(精神的暴力)」34.1%、「手や物でたたかれた(身体的暴力)」18.8%、「雑用などを押し付けられた(精神的暴力)」16.7%、「何を言っても無視された(精神的暴力)」15.5%、「人前でしかりつけられた(精神的暴力)」14.2%、であり、精神的暴力の項目が多く挙がった(表6)。

職種別に上位5項目をみると、全職種で「大声でどなられた」が1位であった。2位以下の項目をみると、看護職では2位に「手やものでたたかれた(身体的暴力)」、4位に「性的な話を聞かされた(性的暴力)」が挙がった。また薬剤師では4位に「物をなげつけられた(身体的暴力)」が、検査技師で5位に「性的な話を聞かされた(性的暴力)」が挙がった。医師と事務職は上位5項目全てが、精神的暴力であった。上位項目に多く挙がった精神的暴力の項目をさらにみると、「人前でしかりつけられた」という項目は全職種に共通しており、看護職においては「雑用を押し付けられた」の患者暴力の被害経験率が他職種と比較し非常に高かった。また「あなた自身に危害を加えるとおどされた」など脅しに関する項目も件数は少な

表4 職種別・性別・年代別の暴力の種類別経験率 (n=645)

	職種別					性別		年代別			
	医師	看護職	薬剤師	検査技師	事務職	男性	女性	20代	30代	40代	50代以上
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)
身体的暴力	11(8.3)	146(37.0)	2(6.3)	3(6.7)	4(10.0)	19(11.0)	147(31.1)	63(33.5)	73(28.5)	25(20.7)	5(6.3)
精神的暴力	38(28.6)	218(55.2)	11(34.4)	16(35.6)	18(45.0)	53(30.8)	248(52.4)	91(48.4)	127(49.6)	58(43.0)	30(38.0)
性的暴力	6(4.5)	115(29.1)	0(0.0)	4(8.9)	2(5.0)	8(4.7)	119(25.2)	51(27.1)	58(22.7)	13(10.7)	5(6.3)

表6 職種別の暴力の項目別経験率 (n=645)

	全職種	医師	看護職	薬剤師	検査技師	事務職	
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	
身体的暴力	手やものでたたかれた	121(18.8)	2(1.5)	115(29.1)	1(3.1)	1(2.2)	2(5.0)
	つねられた	57(8.8)	1(0.8)	55(13.9)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
	足でけられた	54(8.4)	2(1.5)	51(12.9)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)
	げんこつで殴られた	19(2.9)	0(0.0)	19(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	腕をねじられた	16(2.5)	0(0.0)	16(4.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	髪をひっぱられた	15(2.3)	0(0.0)	15(3.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	首をしめられた	5(0.8)	1(0.8)	2(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	2(5.0)
	突き飛ばされた	15(2.3)	2(1.5)	13(3.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	ひっかかれた	60(9.3)	4(3.0)	55(13.9)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
	噛みつかれた	22(3.4)	0(0.0)	20(5.1)	0(0.0)	2(4.4)	0(0.0)
	物をなげつけられた	47(7.3)	2(1.5)	42(10.6)	2(6.3)	1(2.2)	0(0.0)
	刃物等の凶器となる物を体につきつけられた	3(0.5)	1(0.8)	2(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	精神的暴力	大声でどなられた	220(34.1)	30(22.6)	153(38.7)	9(28.1)	12(26.7)
何をいっても無視された		100(15.5)	5(3.8)	86(21.8)	0(0.0)	6(13.3)	3(7.5)
人前でバカにされた		63(9.8)	7(5.3)	43(10.9)	0(0.0)	7(15.6)	6(15.0)
人前で叱りつけられた		91(14.1)	10(7.5)	64(16.2)	3(9.4)	7(15.6)	7(17.5)
人格を否定された		52(8.1)	9(6.8)	35(8.9)	3(9.4)	1(2.2)	4(10.0)
貴方は嫌いだ、貴方と話したくないと言われた		41(6.4)	9(6.8)	27(6.8)	2(6.3)	0(0.0)	3(7.5)
病院職員にむいてないと言われた		24(3.7)	8(6.0)	13(3.3)	1(3.1)	1(2.2)	1(2.5)
「男のくせに」「女のくせに」と言われた		26(4.0)	3(2.3)	19(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	4(10.0)
雑用等押しつけられた		108(16.7)	5(3.8)	99(25.1)	1(3.1)	1(2.2)	2(5.0)
なぐる等のふりをして脅された		60(9.3)	6(4.5)	51(12.9)	0(0.0)	0(0.0)	3(7.5)
あなた自身に危害を加えると脅された		23(3.6)	3(2.3)	19(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)
家族や大切な人に危害を加えると脅された		5(0.8)	3(2.3)	1(0.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)
性的暴力		性的な絵・写真等を見せられた	9(1.4)	0(0.0)	9(2.3)	0(0.0)	0(0.0)
	性的な話を聞かされた	76(11.8)	0(0.0)	71(18.0)	0(0.0)	4(8.9)	1(2.5)
	交際・性交・結婚・妊娠等についてからかわれた	38(5.9)	0(0.0)	37(9.4)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
	胸、ふともも、おしり等を触らせるように言われた	19(2.9)	0(0.0)	19(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	性行為を言葉で要求された	7(1.1)	0(0.0)	6(1.5)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
	性器を露出して見せられた	11(1.7)	0(0.0)	10(2.5)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
	胸、ふともも、おしり等を触られた	41(6.4)	2(1.5)	38(9.6)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
	相手の性器に無理やり触られた	1(0.2)	0(0.0)	1(0.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	抱きつかれた	10(1.6)	0(0.0)	9(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)
	キスをされた	3(0.5)	0(0.0)	3(0.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	しつこくつきまとわれた	11(1.7)	4(3.0)	6(1.5)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)

いながら、被害経験を認めた(表6)。

性別の上位5項目をみると、男性は全て精神的暴力であったのに対し、女性では2位に「手やものでたたかれた(身体的暴力)」、5位に「性的な話を聞かされた(性的暴力)」が挙がった(表7)。

年代別に上位5項目をみると、50代以上では全て精神的暴力であったのに対し、20代では「手やものでたたかれた(身体的暴力)」、「性的な話を聞かされた(性的暴力)」が挙がり、30代および40代では「手やものでたたかれた(身体的暴力)」が挙がった。精神的暴力の項目をみると、50代以上では「人前でしかりつけられた」「人前でバカにされた」の経験率が高く、他の年代の精神的暴力の上位項目と違いを認めた。また、暴力35項目の経験率の傾向として、50代

以上は他の年代と比較すると身体的暴力および性的暴力が非常に低かった。一方で「首をしめられた」「刃物などの凶器となるものを体につきつけられた」という深刻な影響を及ぼす暴力は年代に偏りがなく、件数は少ないながら被害経験を認めた(表7)。

6. 暴力の項目別の経験と基本属性の関連(表8)

内容別の暴力の経験と基本属性(職種、性別、年代、職位、経験年数)の関連を検討した。

職種と有意に関連している項目は、身体的暴力では「手やものでたたかれた」「つねられた」「足でけられた」「ひっかかれた」「物をなげつけられた」などであり、精神的暴力では「何を言っても無視された」「雑用などを押し付けられた」「殴るなどふりをして、驚

表7 年代別の暴力の項目別経験率 (n=645)

	性別		年代別					
	男性	女性	20代	30代	40代	50代以上		
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)		
身体的暴力	手やものでたたかれた	7(4.1)	114(24.1)	49(26.1)	59(23.0)	12(9.9)	1(1.3)	
	つねられた	3(1.7)	54(11.4)	21(11.2)	30(11.7)	4(3.3)	2(2.5)	
	足でけられた	4(2.3)	50(10.6)	17(9.0)	28(10.9)	7(5.8)	2(2.5)	
	げんこつで殴られた	1(0.6)	18(3.8)	10(5.3)	6(2.3)	3(2.5)	0(0.0)	
	腕をねじられた	1(0.6)	15(3.2)	6(3.2)	7(2.7)	2(1.7)	1(1.3)	
	髪をひっぱられた	1(0.6)	14(3.0)	11(5.9)	4(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	
	首をしめられた	3(1.7)	2(0.4)	1(0.5)	2(0.8)	2(1.7)	0(0.0)	
	突き飛ばされた	2(1.2)	13(2.7)	7(3.7)	6(2.3)	1(0.8)	1(1.3)	
	ひっかかれた	6(3.5)	54(11.4)	27(14.4)	25(9.8)	7(5.8)	1(1.3)	
	噛みつかれた	0(0.0)	22(4.7)	9(4.8)	10(3.9)	2(1.7)	1(1.3)	
	物をなげつけられた	5(2.9)	42(8.9)	19(10.1)	24(9.4)	5(4.1)	0(0.0)	
	刃物等の凶器となる物を体につきつけられた	1(0.6)	2(0.4)	1(0.5)	1(0.4)	1(0.8)	0(0.0)	
	精神的暴力	大声でどなられた	46(26.7)	174(36.8)	62(33.0)	94(36.7)	39(32.2)	24(30.4)
		何をいっても無視された	8(4.7)	92(19.5)	32(17.0)	49(19.1)	13(10.7)	6(7.6)
人前でバカにされた		13(7.6)	50(10.6)	16(8.5)	25(9.8)	10(8.3)	11(13.9)	
人前で叱りつけられた		21(12.2)	70(14.8)	26(13.8)	39(15.2)	17(14.0)	8(10.1)	
人格を否定された		16(9.3)	36(7.6)	11(5.9)	24(9.4)	11(9.1)	5(6.3)	
貴方は嫌いだ、貴方と話したくないと言われた		10(5.8)	31(6.6)	13(6.9)	16(6.3)	8(6.6)	4(5.1)	
病院職員にむいてないと言われた		10(5.8)	14(3.0)	7(3.7)	10(3.9)	6(5.0)	1(1.3)	
「男のくせに」「女のくせに」と言われた		2(1.2)	24(5.1)	10(5.3)	11(4.3)	3(2.5)	2(2.5)	
雑用等押しつけられた		7(4.1)	101(21.4)	39(20.7)	47(18.4)	16(13.2)	5(6.3)	
なぐる等のふりをして脅された		9(5.2)	51(10.8)	20(10.6)	27(10.5)	8(6.6)	4(5.1)	
あなた自身に危害を加えると脅された		4(2.3)	19(4.0)	10(5.3)	6(2.3)	4(3.3)	2(2.5)	
家族や大切な人に危害を加えると脅された		4(2.3)	1(0.2)	0(0.0)	3(1.2)	1(0.8)	1(1.3)	
性的暴力		性的な絵・写真等を見せられた	0(0.0)	9(1.9)	4(2.1)	3(1.2)	2(1.7)	0(0.0)
		性的な話を聞かされた	2(1.2)	74(15.6)	28(14.9)	38(14.8)	9(7.4)	1(1.3)
	交際・性交・結婚・妊娠等についてからかわれた	0(0.0)	38(8.0)	18(9.6)	17(6.6)	3(2.5)	0(0.0)	
	胸、ふともも、おしり等を触らせるように言われた	1(0.6)	18(3.8)	12(6.4)	6(2.3)	1(0.8)	0(0.0)	
	性行為を言葉で要求された	0(0.0)	7(1.5)	3(1.6)	3(1.2)	1(0.8)	0(0.0)	
	性器を露出して見せられた	1(0.6)	10(2.1)	5(2.7)	4(1.6)	1(0.8)	1(1.3)	
	胸、ふともも、おしり等を触られた	2(1.2)	39(8.2)	19(10.1)	19(7.4)	2(1.7)	1(1.3)	
	相手の性器に無理やり触らされた	0(0.0)	1(0.2)	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
	抱きつかれた	1(0.6)	9(1.9)	5(2.7)	3(1.2)	1(0.8)	1(1.3)	
	キスをされた	0(0.0)	3(0.6)	2(1.1)	0(0.0)	1(0.8)	0(0.0)	
	しつこくつきまとわれた	5(2.9)	6(1.3)	3(1.6)	5(2.0)	1(0.8)	2(2.5)	

かされた」などであり、性的暴力では「性的な話を聞かされた」「交際・性交・結婚・妊娠などについてからかわれた」「胸・ふともも・おしりなどを触られた」などであった。

年代と有意に関連している項目は身体的暴力では「手やものでたたかれた」「髪をひっぱられた」「ひっかかれた」などであり、性的暴力では「性的な話を聞かされた」であった。

性別と有意に関連している項目は、身体的暴力では「手やものでたたかれた」「つねられた」「足でけられた」「ひっかかれた」「かみつかれた」などであり、精神的暴力では「何を言っても無視された」「雑用などを押しつけられた」などであり、性的暴力では「性的

な話を聞かされた」「交際・性交・結婚・妊娠などについてからかわれた」「胸・ふともも・おしりなどを触られた」などであった。

経験年数と有意に関連している項目は、身体的暴力では「手やものでたたかれた」「つねられた」「足でけられた」「物をなげつけられた」「ひっかかれた」などであった。

職位では「胸・ふともも・おしりなどを触られた」「家族や大切なひとに危害を加えると脅された」「雑用などを押しつけられた」などの項目と弱い関連を認められた。

表8 暴力の項目別の経験と基本属性との関連

	職種 (n=645)	性別 (n=645)	年代 (n=644)	職位 (n=631)	経験年数 (n=633)	
身体的暴力	手やものでたたかれた	68.879**	33.046**	31.018**	5.391*	20.452**
	つねられた	31.823**	14.696**	12.514**	4.825*	15.967**
	足でけられた	26.415**	11.067**		4.211*	20.598**
	げんこつでなぐられた	12.009*	4.579*			
	腕をねじられた	10.009*				
	髪をひっぱられた			15.202**		
	首をしめられた	10.328*				
	突き飛ばされた					
	ひっかかれた	25.276**	9.428**	13.060**	5.009*	15.534**
	噛みつかれた	10.356*	8.278**			
	物をなげつけられた	17.218**	6.655*	11.135*		15.557**
刃物等の凶器となるものを体につきつけられた						
精神的暴力	大声でどなられた	12.780*	6.770*			
	何をいっても無視された	32.605**	21.247**	12.978*	6.470*	
	人前でバカにされた	9.752*				
	人前でしかりつけられた					
	人格を否定された				5.957*	
	あなたは嫌いだ、あなたとは話したくないと言われ					
	病院職員にむいてないと言われた					
	「男のくせに」「女のくせに」と言われた		4.962*			
	雑用などを押しつけられた	48.36**	27.099**	9.185*	7.448**	15.667**
	殴るなどのふりをして、脅された	17.015**	4.697*			
	あなた自身に危害を加えると脅された				4.131*	
家族や大切な人に危害を加える脅された		7.352*		7.787*		
性的暴力	性的な絵・写真などを見せられた					
	性的な話を聞かされた	38.713**	25.332**	14.400**	6.828**	12.749*
	交際・性交・結婚・妊娠等についてからかわれた	21.827**	14.694**	12.029*		
	胸、ふともも、おしり等を触らせるように言われた	12.009*	4.579*	11.946*		
	性行為を言葉で要求された					
	性器を露出して見せられた					
	胸、ふともも、おしり等を触られた	17.79**	10.535**	12.440*	7.887**	
	相手の性器に無理やり触らされた					
	抱きつかれた					
	キスをされた					
	しつこくつきまとわれた					

**p<0.01, *p<0.05.

IV. 考 察

過去1年以内に何らかの暴力の経験がある職員は56.4% (男性35.7%, 女性63.8%) と、約半数であり、看護職だけでなく他職種においても患者暴力を経験していることが明らかになった。医師は34.6% であるのに対し、看護職は67.8% と最も高かった。12職種の職員を対象にした患者暴力の実態調査⁷⁾でも、看護職の言語的暴力は87.2% に対し他職種は26.9%、身体的暴力は77.7% に対し13.5% と、職種により経験率に開きがあったことが報告されている。本研究の看護職の暴力被害経験率が最も高かった特徴と同様の結果

が示されている。今回、暴力被害経験率が高い職種として看護職に続いて事務職も挙げられ、患者と接する頻度が多い職種が暴力を受けやすいと推察された。暴力被害経験の第1位は全職種で共通して「大声で怒鳴られた(精神的暴力)」であり、第2位は「手やものでたたかれた(身体的暴力)」、第3位は「雑用などを押しつけられた(精神的暴力)」、第4位は「何をいっても無視された(精神的暴力)」、第5位は「人前でしかりつけられた(精神的暴力)」と、第5位までに精神的暴力が多く挙げられたが、職種での開きは明らかであり、看護職と薬剤師は身体的暴力が上位項目に含まれた。また看護職と検査技師は性的な話を聞かされる経験があり、女性の割合が多い職種では、性的暴力

の経験率が増加すると考えられた。性別にみると、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力のいずれにおいても女性が男性より患者暴力の被害経験率が高い。

年代別にみると、精神的暴力は被害経験率に大きな違いはなかったが、身体的暴力および性的暴力では30代までが40代、50代以上より高いが、管理職の年代と考えられる40代以降の場合、患者へ直接的なケアや関わりが少なくなることが暴力被害の低くなる要因の一つと考えられる。また、暴力の本質は、たまたまではなく暴力をしてもよいと加害者が思う対象者に向かうと言われており、若い年代ほど、患者の中にはターゲットにしていることも推測できた。暴力をふるう患者は、暴力をふるっても報復できないまたしない相手は若い者、女性であることを学んでいるために、暴力の対象者に選定して暴力をふるっていた。

深刻な暴力の影響があると考えられる「げんこつでなぐられた」「突き飛ばされた」「首をしめられた」「噛みつかれた」「物をなげつけられた」「刃物などの凶器となるものを体に突きつけられた」「しつこくつきまとわれた」の項目について、経験率は低いが被害の実態を認めた。

職種別の患者暴力の被害実態の結果から、暴力被害経験の頻度の高い職種（看護職、事務職など）や暴力の内容（精神的暴力）の対応については、重点的に暴力対策を講じていく必要があるといえる。

研究の限界と今後の課題

患者暴力に関する認識の温度差が、調査対象者の属性に反映していたことが、本研究の回収率の低さとなったと考えられる。職種によっては回答人数が少なく、十分な検討ができていないこと、協力者のサンプルバイアスも考えられた。看護職以外の他職種の患者暴力被害の実態調査の困難さを改めて理解したとともに、今後の調査方法を検討する必要がある。

課題は職種の違いが明確になった上で、どのような暴力防止プログラムを病院職員に行うべきかという検証や、介入などが必要になる。

他の民間企業と比べて、医療機関には世間体や経営上の評判から、暴力事案等が発生した際の対応が遅れる職場風土がある。特に医療従事者は人間の行動を「理解・共有・受容」することを徹底して教育されているせいか、理不尽な暴力を受けても、被害者であることを認めず、ときとして自分自身を責め、心にも身体にも大きなダメージを受けている。

「医療中の暴力」をタブーとせず、それと向き合

う意識改革が必要である。「いかなる暴力も許さない」「組織として医療従事者を暴力から守る」ことを基本方針と定め、病院利用者に安全で安心な療養環境を提供し、医療従事者も安心して業務に専念することができる勤務環境を整備することも課題であろう。病院の安全管理上の問題点を見直し、暴力のない病院経営を行うための見直しと改善策を進める研究が今後の課題である。

謝辞

調査に協力してくださったA大学病院の職員の皆様、ありがとうございました。

本研究の一部は、第82回日本産業衛生学会（福岡）、およびThe First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education（千葉）で発表した。なお本研究は、平成19～21年度日本学術振興会科学研究費補助金「病院職員への暴力のリスクマネジメントプログラムの開発」（萌芽研究）による研究結果の一部である。

注

1999年、International Council of Nurses（ICN）では「看護職に対する暴力に関する方針書（ICN Position Statement on Abuse and Violence Against Nursing Personnel）」のガイドラインで暴力の種類を、虐待（abuse）、セクシャルハラスメント（sexual harassment）、暴力（violence）の3つに分類し定義した²⁰。具体的に、「虐待」とは、個人の尊厳および価値に対する屈辱、侮辱、その他の敬意の欠如を示す行為とし、「セクシャルハラスメント」とは、不快感をもたらす性的な、不要、一方的、嫌悪されるすべての行為とし、「暴力」とは、他者に対して破壊的な行為としている。その後の2002年には、International Labour Organization（ILO）、World Health Organization（WHO）、Public Service International（PSI）、ICNの4機関が協働し、暴力の実態調査を実施し、保健医療部門における職場暴力に対処するための枠組みガイドラインを作成し、その中で身体的暴力（physical violence）と精神的暴力（psychological violence）が暴力として定義づけられている。精神的暴力は言葉の暴力（verbal abuse）、いじめ（bullying）、ハラスメント（harassment）、脅し（threat）を含んでいる。日本看護協会においても、暴力対策指針²¹の中で身体的暴力と精神的暴力を暴力と定義づけ、概ね同じ内容となっている。

暴力の種類は、身体的暴力（他の人や手段に対して身体的な力を使って身体的、性的、あるいは精神的な危害を及ぼすものをいい、例えば、殴る、蹴る、叩く、突く、撃つ、押す、噛む、つねる等の行為）、言葉の暴力（個人の尊厳と価値を言葉によって傷つけたり、おとしめたり、敬意の欠如を示す行為）、セクシャルハラスメント（意の添わない性的誘いかけや好意的態度の要求等、性的ないやがらせ行為）としている。

国際労働機関（International Labour Organization；ILO）では、暴力の行為を具体的に明記した。その行為に

「いじめ、徒党を組んで襲撃、騙す、威嚇、脅迫、仲間はずれ、気に障る言語、攻撃的な言語、無礼な身振り、職場の機材を使えないようにする、敵意のある態度、殺人、レイプ、傷害、殴打、身体的攻撃、蹴り飛ばす、噛みつく、げんこつで殴る、つばを吐きかける、つねる、締め上げる、ストーカー行為、性的、人種的なものを含むいやがらせ」を挙げている。

- ・ ILO-ICN-WHO-PSI. Framework guidelines for addressing violence in the health sector <http://www.ilo.org/public/english/dialogue/sector/papers/health/guidelines.pdf>
- ・ 日本看護協会：保健医療福祉施設における暴力対策指針 2006；1-4

文 献

- 1) NIOSH: Violence in the workplace. *Current Intelligence Bulletin* 1996; 57, 1-22
- 2) 日本看護協会社会経済福祉委員会：看護の現場における安全衛生ガイドライン 2004, 1-52
- 3) Poster EC.: A Multinational Study of psychiatric nursing staffs' beliefs and concerns about work safety and patient assault. *Arch Psychiatr Nurs* 1996; 10: 365-373
- 4) Shen HC, Cheng Y, Tsai PJ et al.: Occupational Stress in Nurses in Psychiatric Institutions in Taiwan. *J Occup Health* 2005; 47: 218-225
- 5) Arnetz JE, Arnetz BB.: Violence towards health care staff and possible effects on the quality of patient care. *Soc Sci Med* 2001; 52: 417-427
- 6) 日本看護協会：2001年「病院における夜間保安体制ならびに外来等夜間看護体制、関係職種の間対応体制に関する実態調査」。日本看護協会調査研究報告書 2002; 63: 17-23
- 7) 鈴木理恵, 小谷幸：「2003年保健医療分野における職場の暴力に関する実態調査」結果について。看護 2005; 57: 59-61
- 8) 旭知恵子, 高橋玲子, 清水みどり, 他：都立神経科病院における看護者に対する患者の身体的攻撃の実態調査。東京都衛生局学会誌 1993; 90: 100-101
- 9) 三木明子, 原谷隆史, 中田光紀, 他：医療現場で看護婦が経験する患者や医師からの暴力。第18回関東甲信越地区看護研究会集録 1998; 353-356
- 10) Ito H, Eisen SV, Sedere LI et al.: Factors affecting psychiatric nurses' intention to leave their current job. *Psychiatr Serv* 2001; 52: 232-234
- 11) 大屋浩美, 中嶋秀明, 橋本陽子, 他：精神科における看護職員確保対策に関する研究。精神科看護 2002; 29: 37-44
- 12) 大迫充江, 鍋田芳子, 瀬野佳代, 他：患者から受ける暴力とサポートの実態。日本看護学会論文集-看護管理 2004; 35: 336-338
- 13) Inoue M, Tsukano K, Muraoka M et al.: Psychological impact of verbal abuse and violence by patients on nurses working in psychiatric departments. *Psychiatry Clin Neurosci* 2006; 60: 29-36
- 14) 安永薫梨：精神科閉鎖病棟における患者から看護師への暴力の実態とサポート体制。日本精神保健看護学会誌 2006; 15: 96-103
- 15) 大岡由佳, 前田正治, 田中みとみ, 他：精神科看護師が職場で被るトラウマ反応。精神医学 2007; 49: 143-153
- 16) Arimatsu M, Wada k, Yoshikawa T, et al.: An epidemiological study of work-related violence experienced by physicians who graduated from a medical school in Japan. *J Occup Health* 2008; 50(4), 357-361
- 17) 三木明子：調査研究からみた医療現場での暴力。労働の科学 63(3), 9-21, 2008
- 18) 古木正文, 矢口節男, 鈴木明宏, 他：精神科病院職員が患者から受ける暴力の実態。日本精神科看護学会誌 2007; 50(1), 218-219